

台湾における酒蔵設立と地域再生への取り組み

—台中市霧峰農協酒蔵が受け継いだ日本の酒造りの心得と新たな挑戦—



岸 保行（新潟大学日本酒学センター／経済科学部・准教授）

曾 國哲（新潟大学経済科学部・特任助手）

浜松翔平（成蹊大学経営学部・准教授）

A) 台湾におけるローカル酒蔵の設立経緯

1. 日本酒の国際展開と海外での現地生産

日本酒は、日本の歴史と伝統に育まれた文化的な製品である。近年、日本酒の国内市場が縮小するなかで、輸出は好調で1989年に6,782kLだった輸出量は、2019年には24,928kLと3.68倍に増加した。輸出金額は、1989年が25.5億円だったのに対して、2019年には234.1億円と9.18倍に増加している。2019年の輸出量は前年度より約3.2%減少したが、2019年は、2009年以来10年連続で輸出金額が過去最高を更新し、堅調な伸びがうかがえる¹。こうした日本酒輸出の伸びは、海外の日本食レストランの普及と深い関連がある。とりわけ、2013年12月に、「和食（日本人の伝統的な食文化）」がユネスコ無形文化遺産に登録されたことで、世界的に注目され、日本食レストランが増加した。和食が無形文化遺産に登録されるまでは、海外での日本酒の消費は、主として海外に在住する日本人によって担われてきたが、近年は現地人による日本酒消費が増えてきている。海外の消費が拡大するなかで、現地人によるSake（サケ）²すなわち清酒の生産も拡大している。米国、台湾、韓国、中国、ブラジル、フラ

ンス、カナダ、イギリス、オーストラリアなどで清酒が醸造されるようになってきており、全世界で約50場の酒蔵が存在していると言われている。

本稿では、日本との歴史的繋がり深い台湾における現地での清酒製造の取り組みの事例をみていく³。台湾では、従来の公売局であった「台湾菸酒株式会社」⁴だけでなく、台湾の台中市霧峰区⁵に、現地の特産の食用米「益全香米」⁶を用いて高品質の清酒を造る小規模酒蔵である「霧峰農協酒蔵」⁷がある。霧峰農協酒蔵は、和食が2013年に無形文化遺産に登録される以前から清酒の生産をおこなっており、2003年から日本酒醸造の研究者である廣井忠夫氏の指導を受け、2005年に清酒生産の計画に着手した。2006年12月には自社生産の清酒の生産に成功し、2007年の年末に酒蔵

1 財務省貿易統計によると、18年の輸出量は約25,700kLであるのに対し、19年の輸出量は約24,900kL、約3.2%減少したが、輸出金額は18年の222億円に対し、19年が234億円となっており、約5.3%増加した（出典：財務省貿易統計、URL：<https://www.customs.go.jp/toukei/srch/index.htm?M=29&P=0>、清酒コード：2206.00-200）。

2 清酒と日本酒の定義に関しては、国税庁の「清酒の製法品質表示基準」に明記されている。それによれば、「原料の米に国内産米のみを使い、かつ、日本国内で製造された清酒」に限り「日本酒」と表示してよいことが記されている。海外で生産される日本酒は、一般的には清酒と表記するのが正しく、現地では一般的にSake（サケ）と呼ばれる（URL：<https://www.nta.go.jp/taxes/sake/hyoji/seishu/gaiyo/02.htm>）。

3 2016年9月に霧峰農協酒蔵を訪問し、黄景建幹事長や酒造りに携わる職員へのインタビューおよび酒蔵見学をおこなった。また、同年10月には廣井忠夫氏に霧峰農協酒蔵とのかかわりについてのインタビューをおこなった。2019年9月には霧峰農協酒蔵を再度訪問し、現地でのフォローアップ調査をおこなった。本稿は、それらの取材で得た知見に基づき纏められている。

4 繁体中国語では「臺灣菸酒股份有限公司」（台湾菸酒株式会社、Taiwan Tobacco and Liquor Corporation、略称：TTL）と表記され、昔の「台湾省菸酒公売局」である。2002年の公売制度の廃止とともに株式会社化された。

5 旧台中県霧峰郷で、2010年に台中が市県合併した際に国家の直轄市に格上げされ、霧峰郷が霧峰区となった。

図1 霧峰農協酒蔵 (出典：筆者撮影)



を開設している。2008年頃からは、霧峰農協酒蔵で醸される清酒が台湾国内で高い評価を得るようになった。2010年以降は国際的なコンクールで賞を獲得するようになり、徐々に台湾の現地ブランドの清酒として広く認知されるようになった。霧峰農協酒蔵は、日本の醸造専門家のノウハウを受け継ぎ、台湾の食用米を活用し、高品質の清酒醸造に成功した現地の小規模醸造所である(図1)。

本稿は、台湾の地で、清酒の製造がどのようにおこなわれるようになったのか、その物語を紹介するとともに、霧峰農協が近年力を入れている地域再生の取り組みについても紹介する⁸。

2. WTO加盟によるタバコと酒の公売制度の終焉と台湾農業市場の変化

台湾は、2002年1月にWTOに加盟したことで、国内の農業を支援し農産品を守るための固定価格での農産品の買取制度を徐々に縮小していくことになった⁹。このことが、台湾の伝統農業に大きな打撃を与える恐れがあったため、当時の行政院農業委員会¹⁰や各地方の農協は、伝統農業への影響を最小限にするために、多くの対応策を考えていた。その対応策の一つが、従来の大量生産の農業から、高付加価値の農業へと切り替える方策であった。台湾政府も、農業観光の開発やブリューワリーを設立する取り組みを積極的に支援した¹¹。

WTOへの加入とともに、2002年には台湾での酒の専売制度も廃止された。台湾でのアルコール飲料の醸造・販売は、もともと公売局であった台湾省菸酒公売局にのみ許されていた。その公売制度の歴史は日本統治時代に遡ることができる。台

6 中国語発音: yì quán xiāng mǐ (Yihchuan aromatic rice)。台農71号。1992年から台湾の台梗4号を日本のキヌヒカリと交配させる実験がおこなわれ、2000年に新しい品種の「台農71号」(商品名: 益全香米)が生まれた。「益全」という名称は当時の研究チームの一員である郭益全博士の名前から由来している (Ming-Hsing Lai, Charng-Pei Le, Ching-Shan Tseng, Huey-Jiuan Huang, Chyr-Guan Chern and Yih-Chuan Kuo, 2001, Development of Aromatic Rice Variety Tainung 71 (Yihchuan aromatic rice), *JOURNAL OF AGRICULTURAL RESEARCH OF CHINA*, No.50 (2), pp.1-12)。

7 繁体中国語では「霧峰農會酒莊」で、台湾台中市の霧峰区にある農協が立ち上げた酒蔵である。台湾の農協の原型は、日本が台湾を統治していた時代に設立された農協組合に遡ることができ、終戦後、国民党政府の主導で農協となり、戦時に台湾の農業は壊滅的な打撃を受けたが、農協の活躍で台湾の農業は復興したと言われている (Han-Chang Liao, 2013, A Study on The Development Processes of Village Wineries Established by Rural Association in Taiwan, *Graduate Institute of Building and Planning College of Engineering*, National Taiwan University)。

8 2019年末に霧峰農協は亞洲大学と戦略的提携を行い、「霧峰轉型發展策略聯盟」を立ち上げ、更なる統合的な高付加価値の観光開発に取り組み始めた (出典: 上下游ネット新聞記事、URL: <https://www.newsmarket.com.tw/blog/128940/>、<https://www.newsmarket.com.tw/blog/128934/>)。

9 行政院農業委員會國際合作處(2001)の「加入WTO農業總體因應對策」を参考のこと(行政院農委會ホームページ、URL: <https://www.coa.gov.tw/ws.php?id=2181>)。

10 繁体中国語では「行政院農業委員會」、日本の内閣に相当する「行政院」に直轄する機関であり、日本の農水省に相当する。「行政院農委會」または「農委會」と省略して表記されることが多い。

11 本稿の霧峰農協だけでなく、他にもたくさんのブリューワリーが立ち上げられた。例えば、南投縣信義農協は2002年に現地の農産物を活かして「梅子酒莊」を立ち上げた。台湾では多くの農協がこのような形でこの時代に酒蔵やブリューワリーなどを立ち上げている (Han-Chang Liao, 2013)。

台湾省菸酒公売局の前身は「台湾総督府専売局」であり、台湾総督府専売局は1901年（明治36年）に、アヘンなどの製薬業務に携わる「台湾総督府製薬所」、食塩業務に携わる「台湾塩務局」、及び樟脳業務に携わる「台湾樟脳局」の三つの部局の合併によって設立された。もともと「製薬」、「塩」、「樟脳」の業務に携わっていたそれぞれの部局の業務を受け継ぎ、更に1905年にはタバコの業務を開始し、また、1922年にはアルコールの専売業務も開始した¹²。

1945年に終戦を迎え、国民党政府の台湾統治が始まり、財源を確保するために台湾総督府専売局を台湾省専売局に改組し、主に「タバコ」、「酒」、「樟脳」、「マッチ」、「度量衡」の5品種を専業業務に取り入れた。また、1947年には、台湾省専売局を台湾省菸酒公売局に改編し、公売品種をタバコ、酒、樟脳の三つに絞った。1968年に樟脳は公売業務から取り消されたが、タバコと酒の公売制度は、その後2001年まで存続していた。2002年1月1日にタバコと酒の公売制度が廃止され、「菸酒税制」¹³に移行された。同年の4月に「台湾菸酒株式会社条例」¹⁴が公布され、7月に台湾省菸酒公売局が民営化され、台湾菸酒株式会社（Taiwan Tobacco and Liquor Corporation、略称：TTL）となり、台湾でのタバコとアルコールの公売制度が終焉を迎えることになった¹⁵。

このような背景で、台湾では伝統の農産物で酒を作る試みが行われ始め、現地ブランドのアル

コール飲料と観光開発がともに進展するようになっていった。本稿で取り上げる霧峰農協も、こうした流れをうけ、高付加価値の農産物の生産をおこなっていく方向に舵をきり、高付加価値の清酒生産を行うようになった。

B) 霧峰農協の挑戦と廣井忠夫氏から受け継いだノウハウ

3. 霧峰農協の高付加価値農業への進出－益全香米を用いた清酒の開発

台中市霧峰区は、かつては阿罩霧¹⁶と呼ばれる地域で、台中市の南端に位置する平野地帯である。霧峰区の東には中山間地域があり、「九九峰」¹⁷が連なっている。また、烏溪（うけい）が流れる地域で三角州地帯となることで、稲作に適した土地

図2 霧峰の香米（出典：筆者撮影）



12 詳細は、TTLのホームページを参照のこと（URL：<https://www.ttl.com.tw/index.aspx>）。

13 WTOの加入とともにGATTの「無差別原則」と「内国民待遇」を遵守するため、タバコとお酒の専売制度が税制に移行した（出典：財政部財政史料陳列室、URL：<http://museum.mof.gov.tw/mp.asp?mp=1>）。

14 繁体中国語では「臺灣菸酒股份有限公司條例」と表記される。

15 詳細は、TTLのホームページを参照のこと（URL：<https://www.ttl.com.tw/index.aspx>）。

16 「阿罩霧」は、霧峰の旧地名。「罩」は中国語では「包む」、「囲む」の意味で、霧峰は昔から長い間雲霧に囲まれており、村は常にその雲霧に包まれるため、「阿罩霧」と呼ばれていた（出典：霧峰農協ホームページ、URL：<https://www.wffa.org.tw>）。

17 「九九峰」は、台湾中部の山。九十九ほどの多くの峰が連なっており、火炎のように見えるため、「火炎山」とも呼ばれている（出典：行政院農委會林務、URL：<https://www.forest.gov.tw>）。

となり、良質な米が獲れる米どころである。米の他にも、特産品として、パイナップル、蜂蜜などが有名である¹⁸。

霧峰農協は台湾の WTO の加盟による市場変化の中で、従来の大量栽培の稲作から高付加価値の稲作へと転換を図っていった。高付加価値の稲作への転換を図るなかで、霧峰に本拠地を持つ「行政院農委會農業実験所」¹⁹と協力し合い、「台農 71 号」(商品名:益全香米)の栽培を開始した(図 2)²⁰。従来の低コストでの大量栽培の手法に慣れていた農民たちは、当初あまり乗り気ではなかったが、粘り強く説得し、農民たちと一緒に試行錯誤を繰り返しながら、最終的には香米の栽培に成功した。霧峰での香米栽培の成功を見た他の地域は、その後、次々と香米の栽培をはじめ、霧峰は「香米の故郷」²¹と呼ばれるようになった。のちに香米は「全国米品質コンクール」²²で賞を取り、台湾の十大米ブランドの一つとなっていった(Liao, 2013)。

4. 廣井忠夫氏と霧峰農協酒蔵との出会い

霧峰農協酒蔵の清酒製造を語る上で廣井忠夫氏が果たした役割は大きい。廣井忠夫氏は長年新潟県醸造試験場に勤めており、麹菌の研究や醸造技術の研究に携わってきた。廣井氏は、紅麹の研究のため 1972 年に初めて台湾を訪れている。その

図 3 霧峰農協酒蔵に飾られている廣井氏のパネル写真(出典:筆者撮影)



時、当時の国立台湾大学農学部蘇遠志氏²³、王西華氏²⁴と一緒に台北、台中の紅麹、宜蘭の酒蔵へ見学にいっている。その後、80年代にはフルーツの研究のため、二度目の台湾訪問をおこなっている。その後、三回目には豆腐の研究のため、台湾を訪れており、四回目の台湾訪問は、新潟県醸造試験場の場長を退任した後に知り合いを通じて蜂蜜酒の醸造の可能性を探るための訪台であった。そして、この四回目の訪問の際に、霧峰農協の人々と知り合うことになったのである(図 3)。

当初、霧峰の蜂蜜業者は、蜂蜜酒の開発は難しいのではないかと考えていたが、台中青年会議所と上越青年会議所とのつながりで、新潟県上越市にある武蔵野酒蔵に蜂蜜酒の開発協力の打診をおこなった。当時、廣井氏は武蔵野酒蔵のアドバイザーとして提言をしていた。その関係で、後に霧峰農協が農協酒蔵を建てようとした際に、蜂蜜業者が廣井氏を霧峰農協の黄幹事長に紹介した。そこで、廣井忠夫氏と霧峰農協とが繋がったのである。

18 詳細は、霧峰農協ホームページを参照のこと(URL: <https://www.wffa.org.tw>)。

19 繁体中国語では「行政院農業委員會農業試験所」と表記される。行政院農業委員会に直轄する機関である。日本統治時代では「台湾總督府農業試験所」と呼ばれ、終戦後、国民党政府に接収され「台湾省農業試験所」へと改編された。主に農産物、肥料、植物などの実験を行う機関である(出典:行政院農業委員會農業試験所、URL: <https://www.tari.gov.tw>)。

20 詳細は、霧峰農協ホームページを参照のこと(URL: <https://www.wffa.org.tw>)。

21 詳細は、霧峰-民生-故事館ホームページを参照のこと。

22 繁体中国語では「全國稻米品質競賽」と表記される。

23 蘇遠志(ソウエンシ、1929-)は、東京大学農学博士で1983年-1989年に国立台湾大学農学部学部長を務める。台湾発酵生産学専門家。

24 王西華(オウセイカ、1926-2014)は、北海道大学農学博士で、台湾キノコ研究専門家。

5. 霧峰農協酒蔵の誕生

香米が台湾の各地で栽培されはじめることで、高付加価値稲作としてはじめての香米栽培も厳しい市場競争に晒されることになり、黄幹事長は、それを打開する策として、香米に付加価値を付ける「清酒造り」の道を考えだしたのである。

霧峰農協は、清酒生産にあたり、醸造技術、生産設備などの一切を持っていなかったため、廣井氏の紹介で、2005年に二人の農協の職員を武蔵野酒造に派遣し、醸造に関する知識や技術を学ばせた。益全香米が清酒生産に適するかどうかについて、廣井氏は次のように語っている。

「香米という米は水をあまり吸わないんですよ。非常に硬い米です。米がなかなか解けませんから、酒がいっぱいできません。それについては、またいろいろやり方を変えて、日本のやり方とちょっと違うやり方でやりなさいということでアドバイスをしながら、造り上げていきました」

香米は、酒造好適米ではなく食用米であるため、醸造の際には様々な困難に遭遇したが、廣井氏の指導を仰ぎながら、試行錯誤を繰り返してそれらの問題を解決していった。生産ラインは、廣井氏の指導のもとで構築した。当初、生産機械は台湾産を使用しようと考えたが、プロセスの基準を満たしていないことが判明し、日本の生産機械を利用して生産ラインの構築をおこなった。また、台湾の気候は清酒の醸造に適した気候とは必ずしも言えず、霧峰での生産にあたっては、温度や湿度を一定の水準に調整する必要があった。

2006年12月には、初めて醸造した清酒が完成し、2007年12月に酒蔵をオープンさせ、本格的な清酒生産に向けて歩みだしたのである。それ以降は、霧峰で栽培された米を用いて日本の醸造技術を使い、現地ならではの清酒を造り続けてきた。2008年からは、国内でのアルコール飲料の審査で

図4 主要銘柄の初霧（出典：筆者撮影）



賞を取り、更に2010年からは、International Spirits AwardやConcours Mondial de Bruxellesなどの国際コンクールに出品し、賞を取るまでになっていった。

また、2014年に大吟醸の生産方法を学ぶため、廣井氏の紹介で新潟県五泉市にある金鶏盃酒造に二名を派遣した。翌年の2015年に「初霧・純米大吟醸」が国内の「農村酒製品評価」²⁵で銀賞を獲得し、2016年のブリュッセル国際コンクールで金賞を受賞している。

霧峰農協の生産する清酒の主要銘柄は「初霧」である(図4)。この名称は、清酒の生産を開始した当時に社員から募って決めた銘柄名である。応募されたさまざまな銘柄名のなかから、社員による投票をおこなった。その結果、1位は「阿單霧」であった。「初霧」は3位の得票数であったが、当

25 ブリュワリーや酒蔵などの地方の農産業資源を文化・観光資源として発展させていくために、行政院農委会は2002年に「農村酒蔵サポート要点」(繁体中国語:農村酒莊輔導作業要點)という法律を公布した。さらに、翌年には「農村酒蔵評価規範」(繁体中国語:農村酒莊評鑑規範)が公布され、その中で「農村酒蔵評価」(繁体中国語:農村酒莊評鑑)と「農村酒製品評価」(繁体中国語:農村酒品評鑑)が謳われ、酒蔵及び酒製品への評価を毎年行うことが示された(出典:行政院農委会農糧署, URL: <https://www.afa.gov.tw/cht/index.php?code=list&ids=300>)。

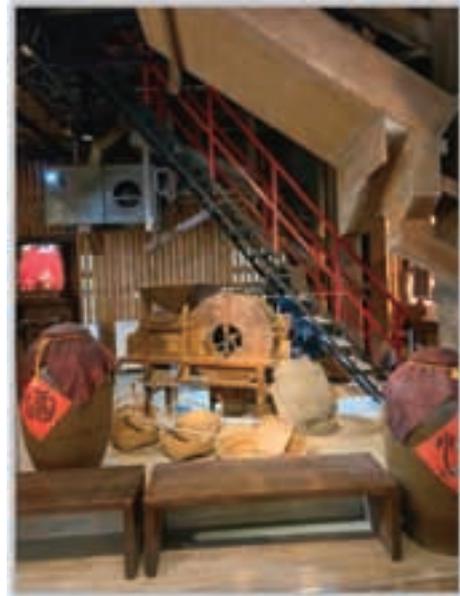
時の黄総幹事が「初霧」という銘柄名を大変に気に入り、最終的には「初霧」という銘柄名に決まった。黄総幹事は、「初霧」という名前が醸し出す「もやもやとした幻想的なイメージ」や「初心に戻る」という意味を連想できることから、この銘柄名に決定したという。

2016年時点には、すでに霧峰農協は発酵用、熟成用の5tタンクをそれぞれ4本所有し、合計で8つのタンクを使用して、年間で10,500ℓ(700ml瓶1万5千本)の生産をおこなっていた。同じ生産ラインで焼酎の生産もおこなっており、焼酎は年間で20,000ℓの生産をしている。焼酎は通年で生産しているが、清酒は年に2回の生産体制をとっており、初回の生産分の販売が終了すると二回目の生産がおこなわれる。清酒は、フレッシュな状態での販売が好ましいのに対して、焼酎は熟成が必要とされるため、年間を通して生産をし、近くの山のなかで熟成をおこなっている。生産する清酒の種類は、純米大吟醸酒、純米吟醸酒、吟醸酒、濁り酒の4種類である。2013年からは蜂蜜酒の生産・販売を開始している。蜂蜜酒の販売が好調で、2016年に入ってから1～8月の間で1万本を売り上げたという。

霧峰農協酒蔵は、自社で精米機をもっていないため、精米については台湾菸酒株式会社に外注している。精米度合は、60%精米、45%精米の2パターンである。添加する醸造アルコールも台湾菸酒株式会社から購入しており、台湾菸酒株式会社とは清酒の生産における協業関係にある。生産に用いる水にもこだわりをもち、甫里山の水、RO水、水道水の3種類の水を使い分けている。

霧峰農協は、観光酒蔵として運営しており、観光客に生産現場の見学・試飲をしてもらっている。酒蔵には展示即売所が併設されており、霧峰農協で生産した清酒や焼酎、蜂蜜酒、益全香米、それだけではなく霧峰農協の特産品であるフルーツやそれらの加工品の販売をしている。酒蔵に併設さ

図5 かつての穀類倉庫（出典：筆者撮影）



れている展示即売所は、かつては米の倉庫として使用していたもので²⁶、台湾人のデザイナーに改装してもらった(図5)。その空間の雰囲気はレトロさと近代とが合わさったニューモダンな色彩を帯びている(図6)。霧峰農協酒蔵には、平日で60人、週末には1日で100人の来場者があり、年間で約3万人を集客している。清酒の主な販売チャンネルはこの展示即売所で、ここでの売上が全体の7割を占めている。他には、一般消費者向けに宅配販売をおこなっている²⁷。一部、レストランへの出荷もしているが、一般消費者向けの販売が多い²⁸。日本酒好きの中には、台湾製の清酒を試してみたいという需要もあるようである。

26 1970年に国民党政府の台湾省糧食局が主導して建てた穀物倉庫、旧名：万豊穀倉(萬豊穀倉)。のちに放置されたが、霧峰農協が放置された穀物倉庫をリフォームし、農協酒蔵として発足した(出典：霧峰農協酒蔵ホームページ、URL：<https://www.twwfsake.com>)。

27 霧峰農協酒蔵のホームページにアカウント登録すればネット購入が可能となる。

図6 かつての穀類倉庫を改装した展示即売所（出典：筆者撮影）



C) 台湾のローカル酒蔵としての成功と今後の課題

6. 台湾国内外のコンクールでの評価と受賞

2010年に初めて「初霧焼酎」がドイツで開催される International Spirits Award において銀賞を受賞して以来、2018年までの8年間で International Spirits Award だけにとどまらず、パリで開催される Vinalies Internationales やブリュッセルで開催される Concours Mondial de

Bruxelles などのコンクールにおいて賞を受賞しており、受賞総数は18回を誇っている（図7）。図8は2010年から2018年までに様々なコンクールでの受賞を時系列にまとめたものである。受賞したのは清酒の「霧峰純米吟醸」や「霧峰純米大吟醸」だけでなく、蒸留酒の「霧峰焼酎」、また醸造酒の「ライチ蜂蜜酒」も多くの賞を受賞している。

霧峰農協酒蔵で造られた製品が海外で多くの賞を受賞してきただけでなく、台湾内の酒蔵評価でも常に高い水準として高評価を受けてきている。表1は霧峰農協酒蔵が2007年に設立されて以来、行政院農委会農糧署²⁹から受けた酒蔵への評価³⁰をまとめた表である。酒蔵が正式に立ち上がった2007年には「良」の評価であったのが、翌年には

28 2015年に台中市の五つ星レストランである Tempus Hotel（繁体中国語：永豊棧酒店）と霧峰農協酒蔵がコラボレーションし、秋の特別料理を作り出した。その秋の特別料理の中に、霧峰農協酒蔵の濁酒が濁酒料理として提供されることとなった（出典：Taiwan News（台湾英語新聞）、繁体中国語版、URL：<https://www.taiwannews.com.tw/ch/news/2794931>）。

29 繁体中国語では「行政院農業委員會農糧署」。行政院農業委員会の直轄機関、農産業を司る機関である。「農糧署」と略記されることが多い。

図7 霧峰が受賞されている三つの国際賞（出典：作者撮影）



図8 霧峰農協酒蔵の国際コンクールの受賞歴（出典：筆者作成）



表1 霧峰農協酒蔵の台湾国内での評価（出典：農糧署のデータより筆者作成）

年	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
評価	良	優	優	優	優	特優							

表2：霧峰農協酒蔵の酒製品の評価（出典：農糧署農糧署のデータより筆者作成）

年	美酒一賞
2008	平泉(醸造酒)＝銅 初霧吟醸(醸造酒)＝銅
2009	初霧吟醸(醸造酒)＝銀 初霧焼酎(蒸留酒)＝銀
2011	初霧焼酎(蒸留酒)＝銅 蜂之巣(蒸留酒)＝銅
2012	初霧焼酎(蒸留酒)＝金 初霧純米吟醸(醸造酒)＝銀 初霧吟醸(醸造酒)＝銅
2013	初霧焼酎(蒸留酒)＝銀 ライチ蜂蜜酒(醸造酒)＝銀
2015	初霧焼酎(蒸留酒)＝金 初霧純米大吟醸(醸造酒)＝銀 春秋又八千(蒸留酒)＝銀 初霧純米吟醸(醸造酒)＝銅
2017	初霧純米大吟醸(醸造酒)＝特別賞 初霧焼酎(蒸留酒)＝特別賞 極濃(醸造酒)＝特別賞
2019	高糖電糖焼酎(蒸留酒)＝銀 ライチ蜂蜜酒(醸造酒)＝銀

すぐ「優」に上がっている。その後、連続して4年間「優」の評価を獲得し、2012年からは「特優」に格上げされ、今日に至っている。

また、行政院農委会農糧署の評価では、酒蔵が「優」の評価を初めて獲得した2008年に「初霧吟醸」が銅賞を受賞し、2011年には「初霧焼酎」が銅賞を、2012年に「初霧純米吟醸」が銅賞を獲得し、2013年には「ライチ蜂蜜酒」が銀賞を受賞し、2015年には「初霧焼酎」が金賞を、「初霧純米大吟醸」が銀賞を受賞している。2008年以降、多くの取り扱い製品・銘柄が国内で賞を獲得している(表2)。

7. これからの課題－観光開発への取り組み

2008年において、台湾での清酒市場は全体のアルコール飲料の消費量のわずか数パーセントであり、台湾での清酒の流通量は微々たるもので、日本酒や清酒を消費する台湾人はまだまだ多くな

い。しかし、台湾人の日本の伝統文化への高い興味・関心や和食に対する肯定的なイメージは一つの大きなチャンスであろう。

図9では霧峰農協と霧峰農協酒蔵のこの20年の取り組みを整理した。霧峰農協は、清酒の発展だけでなく、地域資源を活かす観光開発にも取り組んでいる。その一つが、酒蔵に隣接する場所に、以前から使われずに放置されていた旧診療所³¹があり、それをリフォームして2016年7月26日に「民生・故事館」という名前で、歴史文化の展示施設と現地の有機農産物が味わえるレストランを

30 「農村酒蔵評価」への具体的な評価基準として、「酒蔵の所在地・建築・環境」、「蔵内部施設」、「生産設備」、「衛生管理」、「製造・品質の管理」、「倉庫・輸送の管理」、「顧客クレーム・返品への対応」、「記録データの取り扱い」、「蔵人の資格・訓練」や「経営計画」などがある。上記の評価基準に基づき、各基準に合格し、かつ総合点数が90点以上の場合には「特優」、80点以上で「優」、70点以上で「良」と評価される。70点未満は評価されない(出典：行政院農委会農糧署、URL: <https://www.afa.gov.tw/cht/index.php?code=list&ids=300>)。

31 林鵬飛(1920 - 2010)は、台中州霧峰庄(現在の台中市霧峰区)に生まれ、臺北帝國大學附屬醫學專門部卒業。卒業後、地元の霧峰に戻り、医師として医院を開業し、1990年に退職。高度な医術と地元への愛着を持っていたため、地元の住民から尊敬され「阿飛仙」という愛称で親しまれていた。

図9 霧峰農協と霧峰農協酒蔵の歴史的展開 (出典：筆者作成)

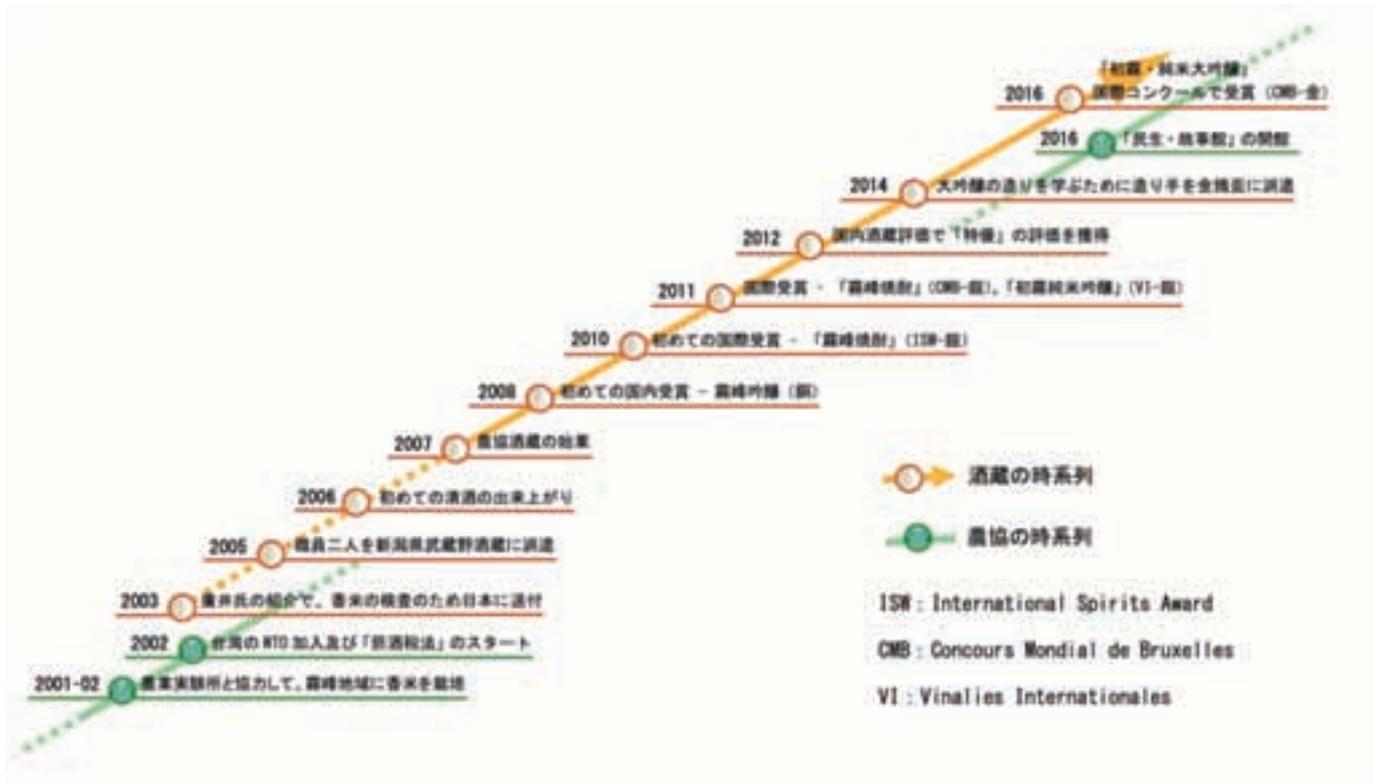


図10 民生・故事館 (出典：筆者撮影)



オープンさせている（図10）。1階は、日本統治時代の林診療時の当時の様子を残した展示が用意されている。1階の展示施設の奥にレストランがあり、霧峰区の有機栽培野菜を使った食事が提供されている³²。2階は歴史資料館となっている。台湾議会の父である林獻堂の歴史ストーリー³³と、日本の統治時代の友人が戦争でなくなった歴史資料を展示している³⁴。さらに、霧峰の農業の歴史を伝えるために、霧峰にある亞洲大学の先生から、この土地の歴史の話を聞き、その内容を纏

めて展示している。

この場所を酒蔵としてだけでなく、霧峰の現地の歴史を発信していくための情報発信地として位置づけている。そして、霧峰の地元の農友³⁵と一緒に現地の農産物に高い付加価値をつけ、有機的な農法で農作するコミュニティとして確立する取り組みをおこなっている。これからも、霧峰農協、霧峰農協酒蔵は日本の酒造りの技術を起点として、霧峰の有形資源と無形資源とを活用しながら、霧峰の地を発展させ続けるであろう（図11、12）。

図11 「霧峰ローカル美酒」の展示（出典：筆者撮影）

図12 「霧峰・民生・故事館」の看板（出典：筆者撮影）



32 現在は、オープンしたばかりのため、ランチとティータイムのみの営業であるが、今後はディナーも営業していく方針であるという。

33 林獻堂（1881 - 1956）は、彰化県阿罩霧莊（現在の台中市霧峰区）に生まれ、台湾五大家族の一つの「霧峰林家」の一人である。日本統治時代に台湾本島人の権利のために非暴力の運動を展開し、「台湾議會之父（台湾議会の父）」と呼ばれている。

34 「神靖丸の撃沈事件」。「神靖丸」はもともと日本籍の民間の貸船であったが、1944年12月に戦争のために日本軍に徴用され、台湾籍の医師とその家族を乗せて、南洋戦区に向かうために高雄港から出航。太平洋戦争で1945年1月に米海軍軍艦に撃沈された。

35 台湾では、地元で「農業に携わる人たち」を愛称して「農友」という言葉を用いる。